



日本詩人選

13

建礼門院右京大夫

中村真一郎

筑摩書房



中村真一郎（なかむら・しんいちろう）
作家・評論家。大正七年静岡生。東京
大学仏文科卒。小説「死の影の下に」
「恋の泉」。評論「王朝文学論」「顔山
陽とその時代」ほか。

日本詩人選13 建礼門院右京大夫

昭和四十七年二月二十日第一刷発行

著者 中村 真一郎

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京二九一七六五一（代表）

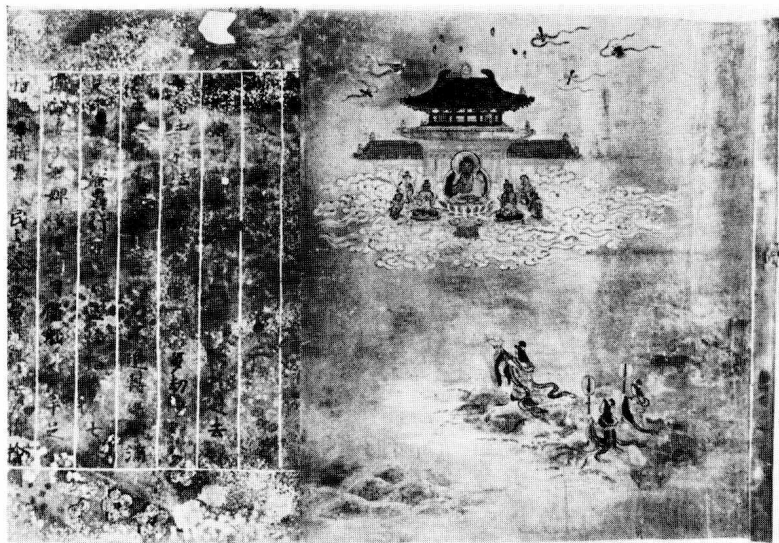
振替東京四一二三郵便番号一〇一—九一

印刷 明和印刷 製本 鈴木製本

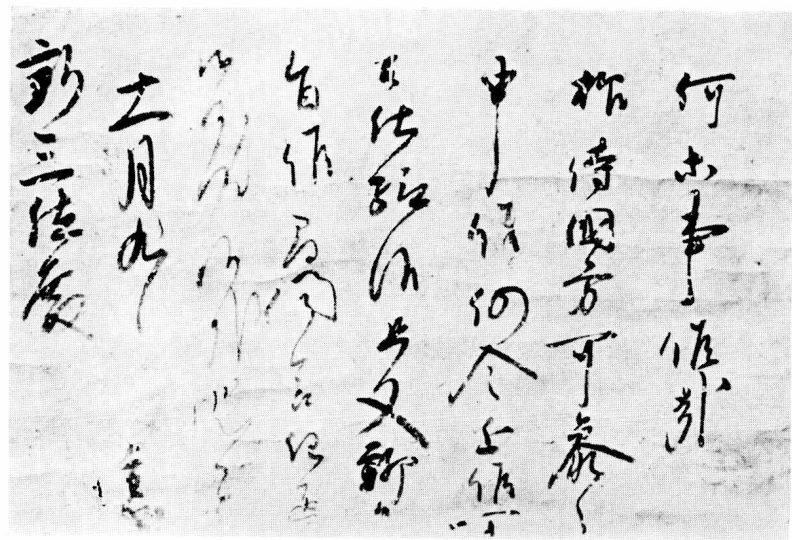
©一九七三 中村真一郎

家乃集りいいてうたむ人
かきとむらとるれこれいふく
さにはわだたわれふかすくえ
みだり 王をわくおほむらふ
さるものうきをく 甲しよむ
城がもひてうきまは我のり
ふきんてかきあむ
王しあてなせありれくつさる
わきもとの世にいさる
たらの後津佐のふとま軍

平家納經提婆品見返し（麻島神社蔵）



平重盛書状（宮内庁書陵部蔵）





京都寂光院裏山の石塔（二六九頁参照）

建礼門院右京大夫和歌索引 (初二句)

ア		いざさらば行方も知らず	209
逢ひに逢ひてまだ陸語も	239	いづこにていかなることを	185
秋きてはいとどいかにか	53	いつまでか七つの歌を	242
秋ごとに別れし頃と	241	何れとも思ひもわかず	101
秋すぎて鳴子は風に	222	いとどしく咲きそふ花の	57
あくがるる心は人に	172	いとどしく露やおきそふ	175
明方に初音聞きつる	229	厭はれしうき名をさらに	41
朝夕にみなれすぐし	192	大はなほ姿も見しに	245
蘆分けて心よせける	60	云はばやと思ふことのみ	186
裾せにける菅田の池の	46	いまはただ強ひて忘るる	244
あだごとにたたいふ人の	164	今や夢昔や夢と	214
跡をだに形見に見むと	210	植ゑて見し人は離れぬる	211
天の川漕ぎ離れ行く	237	憂かりける夢の契りの	247
あらずなる憂き世のはてに	229	うきうへのなほ憂き果てを	187
あらるべき心地もせぬに	188	憂きかたは所がらかと	218
有明の月に朝顔	117	憂きことのいつも添ふ身は	227
ありけるといふにつらさの	138	うち私ふ袖や露けき	240
ありし世にあらず鳴子の	220	移しうる宿のあるじも	56
ありと聞かれわれも聞くしも	39	うつり香もおつる涙に	119
あはれいかに今朝は名残を	226	羨し滋賀の蒲路の	223
あはれさはこれはまことか	191	うらやましほだきりくべて	175
あはれ知りて誰かたづねむ	37	沖つ波岩うつ磯の	38
あはれてふ人もなき世に	86	沖つ波かへれば音は	147
哀れとや思ひもすると	239	おきてゆく人のなごりや	160
あはれにもつらくも物ぞ	169	荻の葉にあらぬ身なれば	254
いかで今かひなきことを	204	おなじ世となほ思ふこそ	198
いかにせむ眺めかねぬる	228	鬼をげに見ぬだにいたく	164
いかにせむわが後の世は	231	おぼつかなをりこそ知らね	66
いかばかり枕の下	104	おもかげを心にこめて	171
いかばかり山路の雪の	83	面影もその名もさらば	247
いかりおろす波間にしづむ	47	思ひいづる心もげにぞ	256
いくよしもあらじと思ふ	121	思ひ出づることのみぞただ	257

思ひかへす道を知らばや	144	言の葉のもし世に散らば	266
思ひわかでなにと渚の	129	恋路には迷ひ入らじと	121
思ふことを思ひやるにも	198	恋ひ忍ぶ人にあふみの	224
思ふこと心の友に	188	こひわぶる心をやみに	141
思ふどちよはの埋火	163	サ	
をりをりのその笛竹も	141	さきの世の契りにまくる	124
カ		さこそげに君なげくらめ	154~5
帰るべき道は心に	217	さそはれぬうさも忘れて	30
かきくらす夜の雨にも	108	さそひつる風は梢を	47
限りありて尽くる命は	256	定めなき世とはいへども	212
かくまでの情つくさで	68	さまざまに思ひやりつつ	237
かげならべ照る日の光	178	さまざまに心みだれて	198
風をいとふ花のあたりは	90	さもこそは数ならざらめ	25
悲しくもかかる憂きめを	196	さりとともと頼む仏も	208
悲しさのいとど催はす	206	さることのありしかとだに	173
悲しともまた哀れとも	202	霜さゆる枯野の萩の	171
かばかりの思ひに耐へて	206	霜さゆる白うすやうの	244
消えぬべき煙の末は	131	救ふなる誓ひ頼みて	205
消えゆくを惜しむ宿に	87	住の江の草をば人の	79
聞かばやな二つの星の	238	関こえていく雲居まで	219
聞くからにいとど昔の	143~144	袖の露やいかかこぼるる	62
きなれる衣の袖の	86	タ	
君ぞなほ今日よりもまた	261	類ひなき歎きに沈む	241
くだけける思ひの外の	265	たちかへる名残をなにか	64
雲の上をいそぎ出でにし	112	たちかへる名残こそとは	160
雲の上をよそになりにし	153	たち慣れし御垣のうちの	219
雲の上に行末遠く	178	橋の花こそいとど	98
雲の上にかかる月日の	15	棚機は契り歎きし	240
雲の上は燃ゆる煙に	58	谷川は木の葉閉ぢ交ぜ	223
雲のよそに聞くぞかなしき	143	たのめ置きし今宵はいかに	42
暗き雨の窓うつ音に	250	旅衣たちわかれにし	105
げにもその心のほどや	139	ためしなきかかる別れに	203
こえぬればくやしかりけり	135	たれが香に思ひうつると	136
九重にみのりの花の	29	誰もその心の底は	163
こと問はむ五月ならでも	220	契りおきしほどは近くや	43
こととはむ汝もや物を	206	ちらすなよ散らさばいかに	121

月をこそ眺めなれしか	221	はや匂へ心をわけて	36
つきもせず憂きことをのみ	231~2	春の花秋の月夜を	16
尽きもせぬうきねは袖に	247	春の花色によそへし	195~6
つくづくとながめずぐして	168	晴れわたる空のけしきも	231
つくも髪恋ひぬ人にも	48	彦星のゆきあひの空を	238
つねよりも面影に立つ	117~8	人わかずあはれをかはず	133
露きえし跡は野原と	210	吹く風も枝にのどけき	112
露けさの泣ける姿に	251	ふくる夜の寢覚さびしき	44
露と消え煙ともなる	256	マ	
露のゐる尾花が末を	75	ましばふくねやの板間に	175
露ふかき山路の菊を	37	またさらに憂き故郷を	212
時わかぬ袖のしぐれに	54	またためしたぐひも知らぬ	181
とこなる枕の下を	75	またも来む秋の暮をば	251
年月のつもりはてても	114~5	迷ひいりし恋路くやしき	145
とにかくに心を去らず	77	まよふべき闇もやかねて	81
とはぬだにつらしと聞きし	151	迷ふらむ心の闇を	249
とはれぬはいくかぞとだに	168	水の泡と消えにし人の	246
とまるらむ古き枕に	108	身の上をげに知らでこそ	117
ナ		都をば厭ひてもまた	217
なかなかに花の姿は	23	見るままに雲は晴れゆく	118
ながむべき空もさだかに	148	めぐりきて見るに袂を	82
眺むれば心も尽きて	241	もしはくむ蟹の袖にぞ	129
ながめ出づるそなたの山の	148	物思へ歎けと成れる	76
ながれてとたのめしかども	149	もの思へば心の春も	77
歎きわびなからましかばと	216	もろかづらその名をかけて	134
夏衣ひとへにたのむ	123	もろどもにことかたらひし	137
何ごとを祈りかすべき	222	ヤ	
何事も変り果てぬる	239	山里は玉まく葛の	170
名に高き夜を長月の	253	山深くとどめおきぬる	214~5
なにとなきことの葉ごとに	173	夕日うつる梢の色の	72~3
何となく夜半の哀れに	241	行方なくわが身もさらば	208
なべて世のはかなきことを	201	夕さればあらましごとの	172
波風の荒き騒ぎに	187	夜をのこす寢覚めに誰を	46
ぬれそめし袖だにあるを	164	よしさらばかけてもいはじ	151~2
ハ		よしさらばさてやまばやと	118
花をこそ思ひもすてめ	44	よしやまた慰めかはせ	242

よそにても契りあはれに	160	忘るとはきくともいかが	145~6
世のつねの松風ならば	18	忘れじの契りたがはぬ	165
ワ		忘れむと思ひてもまた	204
わが思ふ心に似たる	246	わびしらに猿だに鳴く	251
わが心浮きたつままに	220	わびつつはかさねし袖の	102
わが身もし春まであらば	211	われならでたれかあはれと	8
別れにし年月日には	230		

目次

1	われならで…	前書き	セ
2	雲の上に…	宮仕え	三
3	よのつねの…	音楽	七
4	九重に…	宮中生活	七
5	はや匂へ…	なにとなく詠みし歌	壹
6	秋きては…	物想い	叁
7	移しううる…	平家一門	五
8	夕日うつる…	資盛との恋のはじめ	三
9	まよふべき…	肉親への愛	八
10	風をいとふ…	待宵の小侍従	九
11	橘の…	橘二題	九

12	いかばかり…	成親の最期	一〇三
13	吹く風も…	女房の交際	一一
14	年月の…	資盛との恋	二四
15	夏衣…	隆信との恋	二三
16	こひわぶる…	退出のち	一四〇
17	さこそげに…	宮中生活回想	一四
18	つくづくと…	資盛、その後	一七
19	真柴ふく…	歌の連作	一七四
20	ふたたび、雲の上に…	高倉院崩御	一七
21	またためし…	世の終り	一八〇
22	おなじ世と…	平家滅亡	一八
23	なべて世の…	資盛の最期	二〇一
24	今や夢…	建礼門院、その後	二三
25	歎きわび…	旅日記	二六

26 あはれいかに…

尽きぬ想い

三五

27 さまざまに…

棚機之歌

三六

28 いまはただ…

再び、宮中生活

三三

29 君ぞなほ…

俊成九十の賀

三九

30 言の葉の…

後書き

二五

建礼門院右京大夫略年譜

二九

あとがき

二七

右京大夫和歌索引

建礼門院右京大夫

